

アイリス Letter

保護者の皆様へ



2026 年 7 月 22 日発行

第 2 号

広島女学院中学高等学校

<聖書のことば>

「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。

七回までですか。」

イエスは言われた。「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。」

(マタイによる福音書 18 章 21～22 節)

米国 Yale 大学の著名な教授、ローランド・ベイントン先生は、おしどり夫婦として有名でした。留学中、私が「結婚生活の秘訣」を尋ねた時のこと。私は「愛」や「思いやり」といった言葉を期待したのですが、先生の答えは意外にも「forgiveness (赦し)」でした。円満な夫婦関係の根底にそれがあるという事実は、人間の本質を突いているようで深く心を揺さぶられました。

キリスト教はまさに「赦しの宗教」です。聖書の中で、弟子のペトロはイエスに「七回まで赦すべきですか」と問いかけます。「仏の顔も三度まで」という文化に生きる私たちから見ても、七回は十分に寛容な姿勢に見えます。しかしイエスは、「七の七十倍までも」と答えました。これは「490 回」という回数ではなく、「到底赦せないと思う相手であっても、無限に赦し続けなさい」という本当の赦しの姿勢を教えているのです。

事件や事故が起きるたび、被害者家族が加害者を赦すことの、言葉を絶する難しさを痛感させられます。報復の連鎖が絶えない現代社会において、心から人を赦すことは不可能なことのようにも思えます。

かつてイエスも、信頼していた直弟子全員から裏切り同然の仕打ちを受け、十字架で息絶えたとき、そばには誰一人残っていませんでした。それにもかかわらず、復活したイエスは最初に弟子たちの前に現れ、彼らを祝福して赦し、大切な宣教の役割まで委ねたのです。この圧倒的な赦しに触れたことで弟子たちは生まれ変わり、後に殉教するまでイエスの教えを伝え続けました。

私たちは容易には人を赦せません。しかし、「まず神さまが自分を赦してくれている。だからその教えを信じて歩もう」と思えるだけでも、人間として大いなる一歩、大した進歩なのだと思います。

(院長 三谷 高康)

校長室より

一学期終業の日を迎え、いよいよ夏休みが始まります。生徒たちにとっては新しいクラスメートや先生、講演に来られた講師の先生方など、出会いにあふれた一学期でした。授業や部活動、様々な学校行事に一生懸命取り組んでいる生徒の姿に、私もたくさん出会うことができました。

私は、生徒たちと一緒に何かをするときは、なるべく一人ひとりの名前を聞くようにしています。相手の名前を知り、名前で呼び合える関係になることを大切にしたいと思っているからです。

六月の「平和を祈る週」の特別礼拝では、フォトジャーナリストの安田菜津紀さんから、パレスチナや福島についてお話を聞き、改めて「名前」のもつ意味について考えさせられました。安田さんはガザにいる友人のアマルさんや、ガザの中学校で出会ったシャヘドさんの写真を見せながら、何度もその名前を口にされていました。そのことで、遠く離れたガザで起きている出来事が、単なるニュースの中のことでなく、アマルさんやシャヘドさんという名前をもち、顔があり、生活があり、人生を歩んでいる一人の人の出来事として、私の心にぐっと迫ってくるものがありました。名前を呼ぶことによって、その人の存在がより身近に、より現実のものとして感じられたからです。

ガザでは、東日本大震災の後、毎年東北へメッセージを送って風揚げをしていたこと、またシャヘドさんは日本から文房具などの贈り物を受け取っていたこと、そして「私たちは何度も爆撃にあい、家を壊されるつらさを知っている。どれだけ悲しく、つらいことか分かる。今度は私たちの番だ。」という思いで東北へメッセージを送ってくれていたことを、安田さんは紹介してくださいました。

そして今、福島では、今度はガザに思いを寄せて風揚げが行われています。シャヘドさんに「一人じゃないよ」と伝えたい、しかし安田さんが送るメッセージは既読にならない、それを聞いて、胸が痛くなりました。遠く離れた場所であっても、そこにつながりがあり、お互いの顔と名前を知っている人がいる、そのことによって、私たちはその人へ思いを寄せることができるのです。

校内にある原爆慰霊碑には、原爆で亡くなられた方々のお名前が刻まれています。そこに名前がある一人ひとりにも、それぞれ家族があり、人生があり、将来への夢や希望がありました。世界では今も紛争や災害が絶えませんが、一人ひとりが単なる数字ではなく、顔や名前、家族があり、それぞれの人生や夢をもつ一人の人であることを忘れずにいたいと思います。目の前にいる一人ひとりを大切に、名前を呼び合える関係を築いていくこと。その歩みが、平和をつくる最初の一步なのではないでしょうか。

八月六日には、広島女学院ゲーンズホールで平和祈念式典、平和記念礼拝を行い、夜にはコンサートがあります。平和への祈りをもつ時間を大切にしながら、この夏も命の尊さについて考え、実りある夏休みとなることを願っています。

保護者の皆様には、一学期の間、本校の教育活動を支えて下さり、ありがとうございました。夏休みが、ご家族にとっても有意義な時間となりますように。二学期もどうぞよろしくお願いいたします。

(校長 中村 紀子)



生徒支援部より

いよいよ夏休みが始まります。

学校がある日々から少し離れ、自由に使える時間が増える夏休みは、普段とは違うさまざまな体験ができる貴重な期間です。旅行や行事、部活動、読書、学習、家族や友人との時間など、多様な人や物事に触れることは、自分の世界を広げ、これからの生き方や将来を考えることにもつながります。

一方で、自由な時間が増えるからこそ、自分の生活を自分でマネジメントする力も求められます。別途配布している「夏休みの注意事項」をよく読み、生活リズムを整え、安全で実りある夏休みにしてください。

生徒支援部からは以下の点をお伝えします。

①登下校の送迎の禁止について

登下校については、先日もお知らせした通り、夏休み中も公共交通機関や自転車、徒歩で行ってください。学校周辺での自家用車による送迎については、先日、送迎車両の集中により多くの近隣の方にご迷惑をおかけすることとなりました。夏休み中の登校についても、同様のルールを守っていただきますようお願いいたします。

②ネットとの付き合い方について（講演会や現状について）

長期休暇を迎えるにあたり、改めてご家庭で考えていただきたいのが、スマートフォンやSNS、インターネットとの付き合い方です。

今年度も5月に、生徒支援部主催によるネットリテラシー講演会を実施しました。講演では、生徒へのアンケート結果から見える実態を踏まえ、ネットやスマートフォンが私たちの脳や心、人間関係、そして日々の生活にどのような影響を与える可能性があるのかを、近年の研究や具体的な事例をもとに考えました。また、近年急速に身近なものとなった生成AIにどう向き合うかについても触れています。



発達段階にある中高生の脳は、大人と比べて依存的な行動に陥りやすく、その影響も受けやすいとされています。だからこそ、ご家庭の理解も含めて、見せかけだけのルールに終わらせず、そのルールを具体的にどう「行動化」するかが大変重要です。講演後には「5月チャレンジ」として、生徒一人ひとりが自分のネットやスマートフォンとの付き合い方を振り返り、改善したい具体的な行動を自ら考え、実践する取り組みも行いました。

近年の研究では、思春期における過度なインターネット利用が、学力や学習習慣、睡眠、心の安定、自己肯定感、人間関係など、さまざまな側面と関連する可能性が指摘されています。本校に限らず、ネットとの付き合い方で生活が大きく崩れたり、人間関係のトラブルにつながる事例が増加しています。

③ネットへの対応について（保護者の役割と国際的な動きについて）

現在では、子ども本人の使い方だけではなく、保護者の関わり方や家庭全体のデジタル機器との付き合い方も、子どものネット利用や心の安定に深く関係する可能性が

あることが明らかになりつつあります。子どもに「スマホを使いすぎないように」と注意するだけでは、十分ではない時代になっているのかもしれませんが。大人自身はスマートフォンとどのように付き合っているのか。食事中や家族との会話の中で、どのくらい画面を見ているのか。困ったときに親子で相談できる関係があるか。ルールは一方的に与えるものになっていないか。子どもだけではなく、家庭全体でネットとの付き合い方を考える時代が来ているのだと思います。

また、世界各国では、若者の SNS 利用をめぐる規制や議論が年々進んでいます。オーストラリアをはじめ、ヨーロッパ各国でも年齢制限や SNS 事業者の責任について議論が進み、日本においても、子どもと SNS との関係を社会全体でどう考えるのかという議論が始まっています。

④夏休みに向けて

夏休みは、自由な時間が増え、スマートフォンや SNS に触れる時間も長くなりやすい時期です。ぜひこの機会に、ご家庭でも「何時間まで」というルールだけにとどまらず、なぜそのルールが必要なのか、ネットが自分たちの生活にどのような影響を与えているのかを、親子で話し合っていただければと思います。

また、父親母親教室の一環として、今年度も「ネットリテラシーについて」の動画を生徒支援部で作成し、配信する予定です。5 月に実施した生徒向け講演の内容をもとに、ご家庭でぜひ知っていただきたい内容をお伝えします。配信の際には、さくら連絡網を通じてご案内いたしますので、ぜひご視聴ください。

ネットとの付き合い方が、生徒の生活や進路を左右する時代だと感じています。学校での指導だけでなく、ご家庭での対話と見守りが欠かせません。引き続き、ご理解とご協力をお願いいたします。

全力で遊び、全力で学ぶ。そして、自分の世界を少し広げる。そんな夏にしてみたいと願っています。

(生徒支援部)

体育大会

6 月 10 日 (水) グリーンアリーナにて体育大会が開催され、全学年が五色に分かれて競い合い青組が優勝しました。

今年度は中 2 と高 1 のクラス編成が他学年とは異なるため、くじ引きで色決めを行いクラスの枠をこえて団結し取り組みました。昨年同様に生徒主体の体育大会になるように、当日まで体育委員



や生徒会、放送部など数多くの生徒が準備を重ね、滞りなく実施できました。年に一度の行事ではありますが、生徒達が自ら意見を出し合い、年々より良い行事になっていると感じます。今年も競技フロア上に「エキサイティングエリア」を設けたことで、生



徒が競技をより近くで応援し、一体となって楽しんでいる様子が見られました。午前の部では中1の「台風の目」や高3の「むかで競争」で担任の先生が生徒と一緒に参加し、会場を大きく盛り上げてくれました。中1のかわいらしい姿を高校生が大きな声で応援している様子はとても微笑ましく、また、バーから手が離れてしまった走者に「待ってあげて！」

と大声で優しく叫んでいる高校生の姿に、女学院の縦のつながりも実感しました。昼休みの応援団では今年も生徒達が各色工夫を凝らし、衣装やフォーメーションなど、練習の成果をしっかりと発揮しそれぞれに素晴らしい応援を作り上げていました。

午後からの競技では、高1による「台風の目 Ver.2」があり、クラスごとではなく色で集まった仲間達ともしっかりと団結し、パワフルな走りを見せてくれました。中学生による「玉入れ」では、各色 50 個以上の玉が見事にかごに入り、数えるために傾けたかごからたくさんの玉があふれ出てしまい、2 回戦を実施するというアクシデントもありました。終盤では女学院の伝統となっている「着せつけ競走」で、今年も高3の生徒が短い期間に準備をしてくれた仮装を、先生に着せつけていきました。先生方が何に変身するのか、客席もワクワクしながら見守りました。完成後の放送部によるインタビューに、先生達に変身したキャラクターになりきって答えている様子に、客席からは大きな歓声が上がっていました。そして、最終種目の「五色対抗リレー」では、中高共に下級生から上級生にバトンをつないでいき、会場全体が大盛り上がりで応援しました。どの色も最後まで決してあきらめずに走る姿に感動をもらい、プログラムに描かれた絆を感じさせてくれるものでした。日頃の学校生活ではなかなか得ることができない学年を越えた一体感や団結力を、これからの学校生活に活かし、どんどん力を発揮してもらいたいと思います。



今年もお父さんの会の皆様をはじめ、多くの方々のご協力のおかげで無事に実施することができました。そして保護者の皆様にもお忙しい中会場へ足をお運び頂き、たくさんの声援を送って頂きました。本当にありがとうございました。

(体育科)

平和を祈る週（6／16～6／21）

6月20日（土）、今年度の特別礼拝が実施されました。今回は、認定NPO法人「Dialogue for People（ダイアログフォーピープル/D4P）」の副代表であり、フォトジャーナリストとしてご活躍中の安田菜津紀さんを講師としてお迎えいたしました。礼拝は、主題「戦争と人間の尊厳 ～国内外の取材から考える」、ならびに「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい



……できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい」(ローマの信徒への手紙 12 章 15～18 節)の主題聖句のもとで執り行われました。

ご講演の中で安田さんは、ご自身のこれまでの取材経験に基づき、世界各地における平和への願いやそのあり方、そして共に生きるために不可欠な「共感」の大切さについて語っていただきました。安田さんは 16 歳のとき、「国境なき子どもたち」の友情のレポーターとしてカンボジアを訪れ、貧困に直面する子どもたちの取材を経験されました。それを機に、現在は東南アジア、中東、アフリカ、そして日本国内で難民や貧困、災害の取材を精力的に進められています。また、東日本大震災以降は岩手県陸前高田市を中心に被災地の記録が続けられているほか、TBS テレビ『サンデーモーニング』のコメンテーターとしても広く知られています。

講演では、「共感」を心に留めてパレスチナで飢(たこ)を揚げている人々の様子や、戦争前のガザ地区の美しい風景、そこに暮らす子どもたちの弾けるような笑顔など、安田さんが現地で撮影された貴重な写真や動画が紹介されました。私たちはそれらを通して、改めて「平和のあるべき姿」について深く考えるひと時を過ごしました。また、国外の情勢にとどまらず、東北の被災地が歩んできた道のりや、広島における原爆の記憶、平和活動の歩みにも触れられ、共に築き合う平和な世界への共感と行動の意味、そして「共に生きること」の本質を多く教えられました。

この期間中、中学校と高校ではそれぞれ工夫を凝らした取り組みが行われました。中学校では、上空通路を舞台に各クラスで作成した平和へのメッセージを展示する「女学院平和ロード」が作られました。例年、朝の登校時に各学年の礼拝委員が先生方と共に校門の前で挨拶を行う「みんなでおはよう」の企画は、大雨のために実施できず非常に残念でしたが、お昼の集いでは様々な生徒企画が実施されました。16 日には中 1 礼拝委員の企画による「行列のできない女学院相談所」がゲーンズホール前で行われ、大勢の生徒が先生方に相談に訪れた結果、嬉しいことに「行列ができる」ほどの大盛況となりました。また、17 日には中 3 礼拝委員企画の「先生！何が好き？讃美歌編」が、18 日には中 2 礼拝委員企画の「先生へのインタビュー」がそれぞれ校内放送され、女学院生ならではの視点で「平和」に出会う貴重な時間となりました。



一方、高校のお昼の集いでは、15 日から 3 日間にわたり、高 3 生の有志による「沖縄修学旅行フィールドワークのプレゼンテーション」が行われました。今年は特に高 2 生のほとんどが高校チャペルに集い、学年を越えた有意義な交わりの場となりました。さらに、1 年生の企画による「先生へのインタビュー」や、2 年生の企画による教育実習生を対象とした「先輩との座談会 教育実習生編」も放送され、それぞれの昼のひと時を豊かに彩りました。





特別礼拝の後には「講師を囲む会」が催されました。短い時間ではありましたが、高校チャペルに生徒と教職員が集まり、安田さんへ積極的に質問を投げかける姿が見られました。「フォトジャーナリストを志したきっかけ」や、「取材現地でのエピソード」など、安田さんとの貴重な出会いを通じて、参加した一人ひとりの心に平和を想う種が豊かに蒔かれたことと思います。

今回の貴重な出会いを通して、今後の学びと歩みの中で「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」という聖書の言葉を軸に、深く心に刻み、隣人愛のもとで絶えず平和を思い、祈り行動できる者でありたいと願っています。

(宗教教育委員会)

グローバル研究・成果発表会（高校）

6月27日（土）3・4限に、グローバル研究・成果発表会を行いました。韓国語のスピーチと、海外研修・留学に参加した皆さん、Global Issues 選択生からの活動報告を行いました。会場の生徒の皆さんからもたくさんの質問が出て、学び多い時間となりました。

プログラムは以下の通りです。

◆韓国語スピーチの部

『人間らしい言葉の力』（高3 日韓青少年交流事業韓国語スピーチコンテスト出場者）

◆海外研修・留学報告の部

1. マウントユニオン大学研修（高1，高2）
2. 韓国研修（高2）
3. カンボジア研修事後学習（高2）
4. ニュージーランドターム留学（高1）

◆活動報告の部

『Global Issues Research ～Contemporary Issues Related to the LGBTQ Community～』（高3 GI 選択生）

開会の言葉の中で、司会の先生が「旅は遠くへ行くことだけではありません。好奇心を持ち、挑戦することです。」とおっしゃいました。この発表会が、みなさんが世界に一步踏み出すきっかけとなり、みなさんの挑戦を後押しするものになることを願っています。

(グローバル教育推進部)

高校文化講演会

「ホールの音が素晴らしい」。文化講演会にお越しになった森田先生の第一声です。6月16日の文化講演会には森田真生さんをお招きしました。

森田先生はゲーンズホールに対する印象を「祈り、言葉を交わすことが長いこと積み重ねられてきたことがわかる。このホールに響く生徒の笑い声も気持ちよく感じた」と話されました。その場にいた（おそらく）全員が、自分の今いるゲーンズホールという場所を愛おしく、誇らしく感じ、そのままグッと講演に引き込まれることとなりました。話題はマタギのご友人の話、お茶作りの話、AIを生き物として捉える話まで多岐に渡りました。

「どう生きるか」。誰もが胸に抱く問いかけに対して森田先生は次のように話されました。「自分がどんな道を歩むか考えるときに『道路』よりも『水路』をイメージしてみる。地球の道は水が作り出したものである。流れる水によって地形が変形していく。人生を考えるときに『地形を作る』のだと考えてみる。自分はどんな地形を作りあげていくか。そうすると『道を間違える』こともないし、誰かと競い合うこともない。『地球にいる一つの生物として『ここある道』を歩むこと』。自分の『ここある道』とは何か。どう地形を作るか。講演を通して、それぞれが心地よく思考を巡らすことができました。最後に森田先生はこうまとめられました。「できることはわずかでも、その『わずか』の積み重ねで、とてつもないことができるということ。この惑星は証明している。それが希望の基盤である」。



〈森田真生さんプロフィール〉

京都に拠点を構え「独立研究者」として数学をテーマに著作や講演活動などを行っている。著書『数学する身体』で小林秀雄賞を最年少で受賞。数学にとどまらず「いかに生きるか」を主題として生活に根ざした学問を構築している。

（国語科主任）

オープンスクール ～キラリ☆ミライの女院生～

5月30日（土）午前・午後と、2回のオープンスクールを開催しました。授業体験を中心としたオープンスクールは例年7月に開催していましたが、今年は時期を変えて5月末に実施しました。当日は天気にも恵まれ、たくさんの小学生・保護者の方々の来場がありました。マンドリン部の演奏から始まったホールプログラムでは、中学生徒会五人委員の司会・運営によって楽しく進行了ました。またその後の体験プログラムは、様々な教科の教員、生徒の皆さんの協力によって13コースに分かれて実施することができました。





今回のオープンスクールのために多くの女学院生が4月から準備を進めて来ました。女学院アンバサダーとして集まった生徒、また中高生徒会や様々なクラブの生徒の自然体でホスピタリティ溢れる姿が印象的だった、と来場した方々からたくさんのご感想をいただいています。素敵な女学院生の姿に、教員も元気をもらいました。生徒のみなさん、ご協力ありがとうございました。
(広報部)

サラトガ高校・リンブルック高校合同合唱団&高校音楽部・邦楽部ジョイントコンサート

2026年6月20日(土)午後、本校ゲーンズホールで、アメリカ・カリフォルニア州のサラトガ高校・リンブルック高校合同合唱団と、本校の音楽部・邦楽部とのジョイントコンサートが行われました。邦楽部・音楽部の演奏に続き、アメリカの合同合唱団は楽器の演奏も交えながら、様々なジャンルの合唱曲を披露してくださいました。最後の合同曲「瑠璃色の地球」では、両国の生徒が日本語で歌い、素敵なハーモニーを作り出すことができました。



演奏後に行われた交流会では、短い時間でしたが、教員がびっくりするほど生徒同士はすぐに仲良くなりました。お土産や連絡先を交換するなどして交流を楽しみ、「時間が少なすぎる」と名残惜しそうにする生徒たちの姿も見られました。音楽やコミュニケーションに国境は関係ないということを、生徒を通して私たち大人も再認識することができました。

また、この日はコンサートに先立ち、午前中にアメリカの高校生たちが高校1年生の授業に参加しました。両国の高校生の間で流行っているものや、それぞれの平和観などについてディスカッションを行い、ここでも交流を深めることができました。とても思い出深い一日となりました。このような貴重な機会をくださり、関係者の皆様、本当にありがとうございました。

(高校音楽部)

教育実習について

卒業生11名が6月1日～20日の3週間、教育実習を行いました。礼拝や教科の授業、HRの活動だけでなく期間中に体育大会もあり、実習生も楽しい中でしっかり役割を果たしていました。

限られた時間の中で、実習生たちは教師として生徒に接すること、教えることや学びの姿勢を引き出すことの難しさ、授業準備の大変さに気付くことができたと思います。彼女たちの今後の活躍を期待します。

(教育実習係)

保健室だより（２）

夏休みが始まります。長く自由に使える貴重な時間です。家族と過ごす時間を大切にしながら、計画を立てて有意義な時間を過ごしましょう。

また、自然に触れる時間を持ち、心と体をリフレッシュすることをおすすめします。特別にお出かけをしなくても、空を見上げる、植物を観察する、自然の音に耳を澄ます、緑のある場所を歩くなど、身近な自然を生活の中に取り入れてみてはどうでしょうか。

健康に過ごすためには、「早寝、早起き、朝ごはん」の学校生活リズムを保つことが大切です。運動不足になりがちな人は、ラジオ体操、ウォーキングなど、無理なく続けられる運動を日々の生活に取り入れてみましょう。また疲れを感じた時には早めに休養を取り、心と体の疲れをしっかり回復させましょう。



夏休みは身体のメンテナンスにもよい機会です。健康診断の結果を確認いただき、必要があれば病院受診をお願いします。

○学校歯科医 九軒町歯科 福伝龍司先生から

- ①夏休みは、糖分の多い食べ物や飲み物を頻繁に口にするため、虫歯のリスクが高まります。
- ②夏休み中も毎日、歯みがきをしましょう。歯みがきが虫歯予防には一番です。
- ③虫歯は放っておくとひどくなります。治療がまだの方は夏休み中に受診しましょう。

○高校健康教育講演について

7月18日(土)ホールにて高校全学年を対象に本校スクールカウンセラー塚本有香先生に「困ったら助けを求めよう、困っている友達の助けになろう」というテーマで講演をしていただきました。本当に悩んだ時は誰かに相談できないのでしょうか。困った時に自分一人で抱えるのではなく、誰かに相談をすること、相談するための具体的な方法を生徒の気持ちに寄り添いながら教えていただきました。また困っている友達がいたとき、どう対応していくのかをロールプレイを交えながら、温かい雰囲気の中でお話くださり、生徒たちは頷きながら、しっかりと聞いていました。

ご家庭でもお子様の話をゆっくり聞く時間を持っていただきますようお願いします。

(保健室)

心の健康（２）

夏は暑いです。太陽がカーッと照りつけて汗がダラダラ流れて、それで元気になる時と、あまりの暑さにグターッと弱ってしまう時とがあります。暑さは内在する力をパワーアップしたり、心身を弱らせたりします。

暑さをストレスとなる悪いものと決めつけしないで、暑さにどう対応していくか親子で工夫するのも夏休みの課題です。

夏休みは家庭で生活する時間が長いので、親子の関係が見えてきます。この機会に子どもの成長に役立つ親のあり方を再検討してみましょう。親として
過保護？ 過干渉？ 放任？ 厳格？ 服従的？ 圧力的？
それぞれに良い面と悪い面があります。要はバランスがとれているかどうかの問題です。

40 日間の夏休みに親子の間に新しい何かが生まれることを楽しみにしています。



(カウンセラー)

生徒の活躍

◇2026 JBMXF 大東建託シリーズ第 5 戦 広島大会

・ ガールズクルーザー16 アンダークラス部門 (第 2 位) 1 - 5 O. S

◇広島県中学生少林寺拳法大会

・ 女子単独演武の部 (第 4 位) 2 - 6 H. M

8 月 21 日～23 日にかけて京都で行われる第 20 回全国中学生少林寺拳法記念大会の女子単独演武に出場

ヴァイオリンコンサート～響き合う記憶～のご案内

広島女学院に受け継がれる被爆ヴァイオリンとホロコーストの記憶を伝えるヴァイオリンが揃い、平和への願いを伝えるヴァイオリンコンサートが開催されます。

ロシア革命から逃れたのち広島女学院で音楽教師として活躍、当時としては珍しい女子生徒によるオーケストラを指導されたセルゲイ・パルチコフ先生。爆心地から約 2.5 キロの牛田で被爆した先生ご愛用のヴァイオリンは、1986 年広島女学院創立 100 周年記念のため来広した娘のカレリアさんから広島女学院に寄贈されました。その後広島女学院が修復し、今も音色を響かせています。

一方、ホロコーストの記憶を伝えるヴァイオリンは、ポーランドに生まれ、後にパリで楽器店を営んでいたワルター・ベッターさんの楽器です。ナチスによる迫害のなか家族は引き裂かれ、親族の多くがアウシュヴィッツへ送られました。長い年月を経て発見され、2023 年に修復され再び音色を取り戻し、世界各地で演奏されています。

演奏者の盛田恵さんは、本校の卒業生でもあり、ヴァイオリンの寄贈を受けた当時の校長先生のお嬢様でもあります。

みなさまお誘いあわせのうえ、是非ご家族でお越しください。

※広島女学院中高生本人については無料ご招待いただいています。

必ず制服で来てください。

日 時：8 月 6 日 (木)

18 時開場、18 時 30 分開演

場 所：ゲーンズホール

主 催：Strings of Peace 実行委員会 (広島女学院同窓会有志)

※駐車場はありませんので、お車での来場はご遠慮ください。





今月の聖句

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」

(ローマの信徒への手紙 12 章 15 節)

本校の教育を表すいくつかのキーワードがある中、生徒たちによって最も大切にされているものの一つが「隣人愛」であることには、異見の余地がございません。聖書に記されている「隣人愛」とは、イエス・キリストによる「掟（おきて）」であり、命令でもありました。その内容は、「神を愛し、私があなたがたを愛したように、隣人を自分のように愛しなさい」というものです。この教えの下で、生徒たちは他者との多彩な関わりを持ち、繋がり、そして深い交わりを重ねております。

隣人を自分のように愛する営みについて、イエス・キリストは具体的に「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」と語りかけておられます。なぜ喜んでいるのか、なぜ泣いているのかという理由を問うことに留まらず、「共に喜び、共に泣く」こと、すなわち共感を経て行動することを強調されているのです。この行動する営みの源泉は「共感」にあり、共感するためには、「共に知る」ことが不可欠となります。そして、この「共に知る」プロセスこそが、本校における「学び」の土台にほかなりません。こうした学びを通して、生徒たちは多様な隣人と出会い、関わりと繋がりを通して共感を育みます。そして、その共感の下で隣人を自分のように愛すること、すなわち「共に生きる」ことへと繋がっていくのです。これこそが、女学院生における学びの真髄であると言えます。

当たり前のように過ぎゆく日々の中でのみなさんの学びと歩みこそが、女学院の希望であり、共に生きるための光であることを胸に刻みながら、新たな平和への希望を抱いて、まもなく迎える「8・6」の時を共に迎えたいと存じます。

(聖書科K. C)